



門徒代表弔辭全文

前住様 私たちはこの本堂で集い、歌い、踊り、飲み交わし、お聞かせいただき、念佛者としてお育ていただきました。そして多くの朋友が先にお浄土に参らせていただぐのを一緒に見送らせていただきました。そして、今こうして前住様を見送らせていただくにあたり、勝林寺門徒を代表して一言弔意を述べさせていただきます。

前住様は昭和三十六年の宗祖親鸞聖人七〇〇回大遠忌法要を機に勝林寺の住職を引き継がれました。若き頃は出石高校の教師としても熱心に教育に当たられました。今もこの会場には、多くの教え子たちが先生との別れを悲しみ、悲しかった青春時代の思い出を作つていただいた哲俊先生への感謝の気持ちで集つております。

その後、ひげの老僧としてご活躍されました隆雄住職様の体調悪化に伴い、昭和五十四年に教職を退かれると同時に、仏教青壯年会の設立、テレホン法話、寺報の発行と教化活動に邁進されました。仏壯活動は今では各寺院に当たり前に作られていますが、その当時はまだ娘人会はあっても、仏壯などというものがあるま

は少なく、前住様に声をかけられた我々も戸惑うばかりでした。その当時まだ私も三十代の青年。まだまだ寺の付き合いなど関係ないと思つていたところでした。しかし、その活動は今までのお寺のイメージと全く違つていました。瞭子前坊守様の満面の笑顔と共に、春には花見会やソフトボール大会をし、秋には敬老報恩講で演芸会をし、明るく、楽しく、歌い、踊り、飲み交わし、それでいて常に阿弥陀様のもとにあふる喜びと安心感を与えていただくもので、私にとっての人生の転機となりました。そんな私たち門徒一人一人と、ひと時も離れることなく寄り添つて歩んでいた大と同時に、その当時、本願寺の法燈を継承された光真前ご門主様がご就任後、全国五〇〇余の組巡教を行われるにあたつての随行講師としてお勤めをされました。また中央連研講師・基幹運動中央相談員などを勤められ、連続研修会の教材として連研読本の執筆などもされ、本願寺の伝道強化にも努められました。

されたお寺として、門徒と一緒にお寺に集うこと進められました。そして僧侶の独善的な教學を否定して、私たち門徒と共に生活のど真ん中で念佛を問うてこられました。

晩年においても焼酎とニンニクを欠かさず、カラオケを歌いながら匡紹現住職様と共に勝林寺の行事には欠かさずご出席いただき、楽しく過ごさせていただきました。平成二十五年の宗祖親鸞聖人七五〇回大遠忌法要の際にはさすがにお疲れの様子ではありましたが、ますます美しく輝き、コウノトリの舞い飛ぶ本堂で、三人の子どもさん、多くのお孫さんたちに囲まれ、自らの人生をご満悦の様子でした。親鸞さまのお年を越えられてもなお、美幸坊守様の暖かい支えと熱心なご門徒の献身的協力で、寺報を毎月欠かさず発行していただきました。この教化の姿勢は匡紹住職様、そしてすでに若院様にもしっかりと引き継がれご安心であつたことと思います。

ここ一年余りは匡紹ご住職様の運営されますシカバレーのデイサービスに通われ、スタッフの皆さんに支えられながら楽しく、そこでもいろいろ豊富な知識を皆さんに披露することを喜びながら元気に過ごされていました。しかしそうした中でも老いと病はすすみ、こうして死が前住様の身にもやつてしましました。常にお聞かせいただいていたことはいえ、悲しいです。前住様、本当にありがとうございました。前住様が示してくださいたお寺のあるべき姿は、今や全国寺院のモデルとなっております。

今までのお築き下さった基礎の上に、益々輝かしいご法義の相続をいたしますことをお誓いして、門徒一同を代表して最期のお札の言葉をいたします。

前住職の僧侶としての功績や教員としての奮闘ぶりは、責任役員の中島様の弔辞で十分伝えていただきました。私は、家族としてのおじいちゃん（家住は私を「お母さん」と呼んでいました）の活躍（？）を紹介します。おじいちゃんは、家事がとても好きな人でした。もともとやってみたくてしようがなかつたのでしょうかが、前坊守がいる頃は、（男はそんなことするものじゃない）とさせてもらえなかつたから、その反動だつたのかもしません。しかも、やると決めたら、その道を究めるこだわり派。まず、お料理。いろいろなものを作つていましたが、よく覚えているのは、こぶの炊いたの。椎茸を入れたり、豆を入れたりは普通ですが、時に、既成概念にとらわれない大胆な組み合わせが家族を驚かせました。炊くたびに、味が濃かつたり薄かつたりするのですが、たまたま美味しくできた時に、誰かが「おいしいなあ」と褒めようものなら、連日、こぶの炊いたのが数種類食卓に上る」とになります。いつの時からか我が家では「おじいちゃんの料理は褒めない」が不文律になります。（おじいちゃん、「めんなさー」つきに、いちやんの料理は褒めない）が不文律になりました。（おじいちゃん、「めんなさー」つきに、いちやんの料理は褒めない）が不文律になりました。私が前日予約して、おじいちゃんが朝早く干します。これは、私にも、最初は抵抗がありました。おじいちゃんの熱意と、私も仕事に出る前の貴重な時間が増えるのがありがたくてお任せしました。しかし、よく乾くようになると、太陽の動きに合わせて、裏庭（川を隔てた向こう岸は、高校生の通学路）のいたるところに、下着でもなんでも干されるのにはまいりました。「それはさすがに恥ずかしいから、やめてほしい」と頼むと、しばらくはやめるのですが、「やっぱり乾かない」とまた元に戻ります。「美味しさ」「乾く」とを深く追及するおじいちゃんの家事活躍記の一コマでした。（文責 坊守）

七

前住職の僧侶としての功績や教員としての奮闘ぶりは、責任役員の中島義